論説

紫溟会・明倫会・豊州会

―大分県「保守党」の系譜（1）―

野田秋生

一　はじめに

『大分県政党史』は、「西村亮吉氏の赴任前に在りては我が大分県に保守党員と称すべき者一人も無かりしなり」と述べ、しかし「改進党の創立者小原正朝氏と保守党の乳嬉たる西村、平塚両氏」の対立によって、「大分立憲改進党」、実は豊州立憲改進党[1]に対抗する「保守党」として、明治十六年（一八八三）に「豊州会の崛起」となり、これが「本県政党抗争の歴史」の始まりとしている（同書一六六頁）。そして同書は、大分県「保守党」の系譜を、豊州会―豊国同志倶楽部―立憲政友会大分県支部とつないで説いている。

しかし、例えば明治三十三年に立憲政友会が結成されたとき、大分県からの入会者は発足一年後の三十四年九月までに三〇一名であるが[2]、これを郡別に整理してみると[3]、大野郡一一五名以上、宇佐郡七三名以上、直入郡三五名以上が目立ち、他郡は零または一〇名未満であって、明治十年代あるいは二十年代前半に豊州立憲改進党に対抗したとされる「保守党」の本流とは必らずしも結びつかないと思われるのである。つまり、先の「保守党」の系譜を、単線的に展開したものと理解することには問題があるとしなければならない。

そこで、以下に、本県「保守党」の形成―展開の過程における二、三の問題について若干の検討を行ってみたい。

二　「豊州会の崛起」について

『大分県政党史』によれば、「県下亦大分立憲改進党の結成を見る（中略）穏健派の人々、並に官辺縁故者は熊本県の紫溟会と気脈を通じて相呼応し、明治十六年四月豊州会を組織」（同書二六四頁）した。いご諸書これによっており、定説となっているようである。④しかし同書はまた「然るに第一回衆議院議員選挙に近づき帝政派の豊州会も次第に政党的に活動することとなり」（二六六頁）、結社規約である「誓約書」を明治二十二年十二月に起草したとも述べているのである。

つまり、いわゆる「豊州会の崛起」は明治十六年なのか、二十二年なのかを『大分県政党史』じしんが必らずしもはっきりさせてはいないのである。

先まわりして言えば、筆者は、通説に反して、政党「的」に活動するものとしての「豊州会の崛起」は二十二年であって、それまで豊州立憲改進党に対抗する存在としての「豊州会」は無かった、と考える。

理由の第一。西村・平塚らの機関紙とみられた『大分新報』が明治十六年に発刊され、豊州立憲改進党の機関紙『南豊新聞』が廃刊に追い込まれると、その後は中津の『田舎新報』がこれに対抗した。ところが、『田舎新報』はしばしば『大分新報』批判の記事・論説を載せているにもかかわらず、「豊州会」という文字は全く記されることがない。

第二。『大分県統計書』明治十七年の警察の項には、県下の政党、党員数を記載しているが、そこには「豊州立憲改進党」と「竹田改進党」の二党が掲げられているだけで、「豊州会」の名は見えない。

第三。明治十六年五月三十一日付『郵便報知新聞』は「九州政党の現状」という記事を載せているが、『大分県政党史』が四月に結成したとする「豊州会」の名は見えない。

第四。『大分県政党史』に寄せた元田肇の序には「余は利光鶴松氏と共に帰県し檄を県下に伝へしに来会する者百余名に達し、

直に会を設けて豊州会と称したり」（同書三頁）とあり、また本文中にも「元田肇氏は利光鶴松氏と相携へて帰県し、大分県に於ける改進党に反対する非改進主義者の大同団結を組織し、豊州会と称す」（二六八頁）とあって、「豊州会」結成の事情については一致する。たゞし日付については、元田の序は二十三年としているが、本文は二十二年七月とし、これは後者が正しいようである（「利光鶴松翁手記」）が、いずれにせよ「豊州会」結成十六年説を否定するものであろう。

なお『大分県政党史』は、十六年の「豊州会」結成時のメムバーとして、下瀬文蔵、菊池干城、広瀬岸太郎、後藤田鶴雄、荒木歓吉、伊東金十郎をあげ、「明治十六年四月創めて組織されたる豊州会は（中略）二十年頃迄は西村県令、平塚警部長等の間接の声援を受けて全盛を極めたるなり」（二六六頁）と述べている。あげられた名前は、いずれもこの時期の県会議員であるが、しかし十六年から十八年にかけては、大分県会は最も激しく西村県令と抗争した時期であり、大分県会は、副四郎一、鴛海百郎、賀来素吉、江島久米雄、安藤安吉ら豊州立憲改進党の主要メムバーによってリードされていたのである。⑤下瀬らが「全盛を極め」た様子は全くないし、彼らが党派的に結束していたと見ることもできないのである。

二　紫溟会と明倫会について

しかし、それでは明治十六年のいわゆる「豊州会の崛起」は全くの事実無根なのであろうか。そこで注意されるのが、熊本の紫溟会と大分の明倫会である。『大分県政党史』も「熊本県の紫溟会と気脈を通じ」と述べている。

紫溟会は、周知の通り、明治十四年に佐々友房、古荘嘉門らが中心となって結成した国権主義団体であり、陰に井上毅の指導を受けていたが、系譜的には熊本藩校時習館の出身者グループの学校党につながるものであった。⑥ところで、結成まもなく紫溟会は各地に遊説員を派出する。大分県のばあい、『紫溟雑誌』明治十五年三月号は、十四年十月初旬から、沢村大八、牧相之の二人を「竹田、大分、鶴崎」に送ったことを報じている。つまり、旧熊本藩領であった地域が遊説先にえらばれたものであろう。また『田舎新報』五六号、六三号には、十五年六～七月にかけて古荘嘉門が大分、竹田で活動していることを伝え

ており、紫溟会の大分県に対するはたらきかけが、継続的かつ熱心なものだったことがうかがわれるのである。

ところで鶴崎といえば、もちろん毛利空桑の存在を見逃すわけにはゆかないであろう。空桑の尊王論、反民権論の立場と、彼と熊本との関係は改めて指摘するまでもないが、空桑門下の田島元齢や上野敬斎、阿部一行らもまた熊本時習館の出身であった。紫溟会―学校党―時習館の人脈と空桑一門の結びつきを推定することはゆるされよう。

『東京日日新聞』によれば、明治十五年六月に直入郡有志によって白丹親睦会が結成されているが⑦、鶴崎の空桑の天壌社、皆春の回天社などもその前後に結成されている。これらが紫溟会のはたらきかけの結果として結成されたものかどうかを確定する史料はないが、紫溟会による大分県へのはたらきかけの時期とは一致しているわけで、その中で紫溟会に呼応し連携する関係に入って行くのはごく自然であったろう。

こうして、大分県側のこれら国権主義団体は、明治十五年十月、京都におけるいわゆる「西京開設有志大懇親会」に参加した。

この大懇親会は、福地源一郎、丸山作楽らの立憲帝政党が呼びかけた全国「帝政党」＝反民権勢力の大結集をめざしたものであったが、その「臨員名簿」⑧によれば、会する者三一〇名中に紫溟会員は実に一〇〇名（熊本県九八名、長崎県二名）を占め、紫溟会の「祝詞」が披露されている⑨。紫溟会が牛耳をとったのである。

ところで、九州からは、紫溟会の他に福岡、熊本、大分三県から四四名が参加しているが、大分県からの参加者を示せば次の通りである。

○久住親睦会（マン）　秦直平（直入郡久住村）、工藤孫次郎（同）、秦啓次郎（同）、佐藤亀四郎（同）

○回天社員　後藤田鶴雄（大分郡皆春村）

○天壌社員　田島元齢（大分郡鶴崎町）、河野光平（同）

○大分県有志　中川濤太郎（大分郡竹田村）（マン）、橘秀登（同）、矢野勘三郎（大分郡玉来村）（マン）遠近武則（大分郡大分町）、工藤宅蔵

（速見郡杵築村）、堤正貫（同）、加藤覚三郎（同）

十五年秋段階で、彼らと紫溟会の提携関係はすでに明らかと言えるであろう。

ところで、彼らはその後、毛利空桑を会長に推戴することになる「明倫会」の結成に乗り出すのである。明治十六年五月十七日、大分郡野津原村慈正寺で明倫会組織会の一つが開かれたが、これに前記の大懇親会出席者の中から、後藤田鶴雄、田島元齢、橘秀登、中川濤太郎の参加がたしかめられ、またこの時点で西村県令の腹心平塚恰も参加した。[10] 大分県「保守党」の結集が具体化したのである。かくて、明治十六年五月二十三日、「明倫会」は大分警察署に対して結社届を提出した。[11]

ところで、その主意書は「頃日天下ノ民心靡然トシテ新奇（中略）ヲ好ミ沛乎トシテ欧流ニ艶美流連シ（中略）甚タシキニ至テハ天賦民権自由権利等ノ説ヲ主張シ以テ君民同治（中略）共和政治ハ万民幸福ノ善政トス急躁詭激或ハ以テ社会ノ秩序ヲ顧ミス此ノ弊ヤ往テ閲数年ナラハ彝倫ヲ紊乱残害シ国家体ヲ破壊スルノ禍ヲ顕出シ我カ皇国ヲ提テ何レノ地ニ置カンモ亦未ダ知ル可カラス」と自由民権派を批判した上で、「今ヤ吾カ徒同志（中略）集合会同ノ則ヲ設ケ常ニ養徳明倫ノ道ヲ講シ国家数百年養フ所ノ仁義忠孝ノ遺風ヲシテ下ハ府県郷里党ニ明カニシ上ハ国体ヲ維持スルノ始メヲ為サント欲ス」と述べて、その「主意ヲ三綱」に集約した。すなわち、「一、尊王愛国ノ旨ヲ体シ倫理道徳ヲ明カニスルヲ本務トス、二、国体ヲ維持シ国権ヲ拡張スルヲ目的トス、三、主憲帝政（ママ）ヲ希望ス」である。

いま厳密な思想史的検討を加える余裕も能力も筆者にはないが、民権論を批判する前半部分の論理は、井上毅起草といわれる紫溟会の主意書と全く同じである。ところが、これに反して後半部分では、「明倫ノ道」「仁義忠孝ノ遺風」を「郷里党ニ明カニ」する道徳的教化活動を行うことを述べるのみで、「三綱」の第二、第三を実現するための具体的、政治的プログラムはもちろん、それを結論する論理の展開もないのである。このことは、紫溟会との比較においても留意される点であるが、本稿の主題に則して言えば、「三綱」の第二の国権論の主張が唐突に掲げられるのみで、対外関係における国家的独立を内容とする国権論が全く述べられていない点が注意される。なぜなら、のちに本県「保守党」の形成に一つの役割を演じる中津の宮

村三多は、当時は本県の民権派の陣営にあった（但し主流ではない）が、その主張を特色づけるものは色濃い対外的な国権論であったからである。宮村の出発点と、明らかに異なる地点から「明倫会」は出発しているのである。

ところで、この結社届に付された「明倫会員名簿」[12]によれば、会は会長の下に「会幹」がおかれ、これが実質的に会の運営に当ったものゝようである。たゞ、紛失した別紙があるらしく、為にいま判明する会幹は次の九名のみである。

△中川伝太郎（濤か）（直入郡竹田村）　△橘秀登（同）　渡辺盧三（北海部郡臼杵町）　中村新一（同）　△遠近武則（大分郡大分町）　佐藤平治（直入郡久住村）　佐藤登四郎（同）　△秦直平（同）　立川義雄（大分郡竹矢村）（△印「有志懇親会」参加者）

次に、会員姓名を記したものが数葉あり、整理すれば次のようになる。

大分郡入蔵村士族橋本六朗以下九名
同郡竹矢村士族河野周平以下一八名
同郡福宗村平民池辺計高以下一四名
同郡下津尾村士族吉野武三以下四三名
同郡鶴崎町平民毛利到（空桑）以下一九一名
大野郡上市村平民松尾伊郎以下七名
直入郡久住村士族佐藤平治以下四八名

以上は地域ごとにまとめられたものであるが、この他に、大分郡吉田村二名、谷村三名、篠原村二名、野津原村一名、鬼崎村二名の名が一括追加されていて、総計三三一名となっている。

会幹の名前、会員の地域分布からみて、この「明倫会」が、先に紫溟会が牛耳をとった「西京開設同志大懇親会」に参加した団体を核とする形で成立したものであることは、もはや間違いないと言ってよかろう。

『大分県政党史』がいう、明治十六年における「豊州会の崛起」はなかったが、「紫溟会と気脈を通じ」た本県「保守党」

の「崛起」はたしかにあったのである。

三　「豊州会」の結成について

それでは「政党的に活動」するものとして「豊州会」が結成された事実はあるのだろうか。あるとして、それは如何なる事情で、いつ行われたのであろうか。

先まわりして言えば、それはともかく結成され、しかし事情は単に『大分県政党史』のいう「第一回衆議院議員撰挙(マヽ)に近づ」いたということだけではなかったし、その時期は明治二十二年八月であったと考えられる。『明治政史』によれば、旧九州改進党熊本大会は、当初は九州有志者大会として明治二十二年二月二十三日、熊本花岡山に開催された。ところが臨場した紫溟会の佐々友房らが会の性格を質したことから紛糾し、旧九州改進党の山田武甫らのリードで、結局は九州改進主義者の大会として強行された。このため佐々らは席を蹴って立ち、さらに旧九州改進党のグループも、前田下学派（大同派）と山田武甫派（非大同派）に分裂、大会そのものは東京の大同団結運動への不参加を決議した。こうして、九州の団結をはかったものが一転して「九州独立派、大同派、非大同派」に三分する結果となった。そして、大分県は、非大同派に大分改進党、紫溟会や玄洋社を中核とする九州派に大分県有志者が参加したとして、大同派には大分県からの参加はないとしている（以上、同書下巻四九頁）。

さて、この大会への大分県からの参加者として、のちに改進党系の県会議員になる安藤黄楊三社長の県友社発行の雑誌『県之友』[13]七号は以下の氏名をあげている。

永松壮三郎、松原清八（東国東）藤波久文、内田安定、佐藤秀英、宇佐美春三郎、前田利功（速見）後藤喜太郎、小野吉彦
安藤黄楊三（大分）、久保敬徳、大塚水哉（直入）小幡小吉、武石橘次（玖珠）、加藤松五郎、加藤増右ヱ門（日田）、佐藤又四郎、江島久米雄（宇佐）、山口半七、半田鉄一郎、平田美年（下毛）

ところで、問題は前田利功である。『県之友』記載の仕方からすれば、彼は改進党系ということになり、『明治政史』も大分

県から大同派への参加はないとしていた。しかし彼は、その直後に大同派に走ったらしい。『九州日日新聞』明治二十二年六月六日号は「大分県に大同派起る」という記事を掲げ、次の通り述べている。「速見郡杵築村に於て、九、十の両日を以て大同倶楽部の大懇親会を開設（中略）其の首唱者は多分彼の過般東京の該派大会に列した前田利功氏ならん」。すなわち、前田利功は九州改進主義者大会の決議に反し、大分県の改進党（非大同派）とも離れて、大同団結大会に参加したことが知られるのである。また明治二十四年八月に、郡制に関して知事に提出された県属米原耕蔵の復命書[14]でも、速見郡会は前田利功ら「大同派ノ勝ニ帰ス（中略）議員ノ三分ノ二ヲ占ム」とあって、明確に大同派の立場に立っている。『大分県政党史』は、明治二十四年の県議前田利功を豊州会所属と記しているが、以上によってこれは検討を要するといわねばならないであろう。

さて、しかし『県之友』が掲げた氏名の他に、二十二年の熊本の大会に参加した者もあったらしく、その第八号に、「熊本の会議に出席したる改進党外の有志者」云々という記事が見え、これが『明治政史』の言う「九州派」の大分県有志者であろう。では、それは誰であろうか。

二十二年二月二十九日、先に花岡山での大会を退席した紫溟会の佐々友房、牧相之、沢村大八らは、対抗して九州保守主義者の大会を開催した。参加したのは紫溟会、福岡玄洋社などであるが、その中に大分から「非改進派」として毛利莫、後藤田鶴雄他数名の参加が知られる[15]。つまり、いわゆる「九州派」の大分県有志者とは、かつての明倫会グループであった可能性がきわめて強いと思われるのである。

紫溟会は、この直後の四月、熊本国権党を結成した[16]。そして、その機関紙となった『九州日日新聞』四月二日号は「豊州の団結将さに成らんとす」という記事を掲げ、大分県の「尊王愛国の志を抱く」県下一二郡の有志者が新政党の運動を試みていると伝えている。

つまり、大同団結運動高揚の気運の中での九州有志者大会の分裂がもたらした、いわゆる「九州派」形成の過程で、熊本国権党の結成とほゞ同じ事情のもとに（おそらく九州保守主義者大会の確認にもとづいて）「豊州会」の結成が始まったと推定するこ

とができるのである。

そこへ、四月十九日の大隈条約改正案の暴露という事態が突発する。大同派は四月三十日、河野広中の大同倶楽部と大井憲太郎の大同協和会に分裂するが、しかし大隈条約改正案に対する反対では一致し、国権主義の立場から同じく反対の態度をとる熊本国権党（紫溟会）や福岡玄洋社、さらに『日本』や『日本人』のグループ等と、八月十五日、東京神田明神の開花楼で、非条約改正委員会を発足させた。[17]

ところで、これより先の十二日、九州の条約改正反対有志者は、同じく開花楼で親睦会を開いたことが『九州日日新聞』明治二十二年八月二十一日号に報じられている。その出席者中の主だった者としてあげられている名前に、頭山満、佐々友房、前田下学らと並んで、毛利莫の名を見ることができる。おそらく十五日の非条約委員会発足の集会にも参加したと推定して大きな誤りはあるまい。

こうして、大分県における「尊王愛国の志を抱く」者の「新政党の運動」は、大隈条約改正案反対という新しい要因をかかえこむことになったのである。そして、このことは従来の紫溟会と連携して来た「明倫会」参加グループ以外の、反「改進党」勢力との合流をうながす契機となったはずである。

こうして、大同団結運動の分裂と大隈条約改正案反対の二つの事情にうながされながら、明治二十二年八月二十二日、「豊州会」は結成された。すなわち『九州日日新聞』同年八月二十五日号は次の通り報じている。

「前号の紙上に大分特発報を以て大分県有志が去る廿二日大分春日蓬莱館に会し条約改正中止の建白事件と団体組織の事を協議し熟（マヽ）れも都合よく纏まりし趣を報じ置きしが、今其の詳報を聞くに同日の懇親会は重もに条約改正中止建白の事に関し開設したるものにして大分郡は勿論西国東郡速見郡直入郡北海部郡の有力者都合百五十余名と外に此ごろより帰県中の元田直元田肇の両氏も出席ありしが建白奉呈の事は一人の異議を容る者なく満場一致に出しかば直ちに建白起草委員を撰び当選したるは元田肇氏及び下瀬文蔵荒木歓吉氏にして（中略）次に斯く同志者の会合したる以上は一箇の団体を組織して互に気脈を通じ親

睦を厚ふして内は県下の公益を謀り外は国家の大局に向ふて運動せざるべからずとの議出でしが是も満場一致にて直に団体を組織することに決し、会名を豊州会と称したり」。

県内発行の新聞でたしかめることが出来ないのが残念であるが、『大分県政党史』に寄せた元田肇の序とも、事情についてはぴったり一致する。

たゞ、念のために言えば、「豊州会」は結成されたが、それが直ちに政党としての「豊州会」の結成を意味するかどうかには、多分に疑問が残るのである。

『大分県政党史』は同年十二月、大分町山陰霊山宅で「豊州会」の「誓約書」を起草したと記し、「頗る奇異（中略）政党の宣言に非ず」とコメントしている（同書二六七頁）が、「豊州会」が政党ではなかったことをそれが示していると考える方が妥当なのではなかろうか。事実、先にあげた郡制に関する米原「復命書」中の郡会「議員撰挙ノ景況並議員ノ党派別」その他の項に出て来る党派名は、「改進党」「改進派」「大同派」および「自治党」[18]（下毛郡のみ）であって、「豊州会」という名はないのである。さらにまた、次の事実も留意されるところであろう。

すなわち、小原正朝を代表として大分県の改進党有志者五三九名は、大隈条約改正案断行の建白書を八月三十一日に提出した。結成された「豊州会」が条約改正反対の建白書提出を決議するのは、経過からしても情勢からしても当然であった。それなのに、実はこの反対建白書は、如何なる事情があったのかは不明であるが、ついに提出されないで終ったのである。[19]

結局「豊州会」とは、大分県の「保守党」のゆるやかな非政党的な団体にすぎなかったというのが筆者の推定である。そして、だから『大分県政党史』が、明治二十四年の前田利功を、先記米原「復命書」が大同派としているにもかかわらず、これを「豊州会」所属とすることもできたのではなかろうか。

四　残された課題

以上、後の大分県政友会に合流する「保守党」の幾つかの流れのうち、最も早く顕在化した明倫会系の動きと、「豊州会」の結成に至る情況と本県大同派の一部について、さゝやかな検討を行った。しかし冒頭に述べた大分県政友会の中の大勢力である大野郡・宇佐郡は、以上の行論中に全く登場しないのであって、つまり本県「保守党」を形成するもっと別の勢力や潮流があったわけであり、それらを明らかにする作業が必要である。当然、それら様々の流れを作り出した人々の階層や地域の事情、指導者の思想などの検討も必要となろう。

さらに、そもそも『大分県政党史』から借用した「保守党」という用語についても、改進党あるいは「進歩主義者」などという用語を含めて、理論的に吟味し直されねばならない。しかし、すべては後日を期すほかはない。ご教示を乞う次第である。

註

① いわゆる大分立憲改進党が、正しくは「豊州立憲改進党」であることは、拙稿「政社から政党へ」（『大分県地方史』一〇七号）

② 『立憲政友会議関紙・政友』明治三十三年十月十五日号から三十四年十月十日号までに掲載された入会者氏名による。但し、若干の重複がある。

③ 『明治三十一年衆議院議員撰・被撰挙有資格者名簿』（大分県立大分図書館蔵）と照合したものである。但し『政友』の記載順は、ほぼ地域別になっているので『有資格者名簿』で確認できる名前を拾い、同一地域の者にはさまれて記載されている名前をその地域の者とし、それ以外は不明とした。三〇一名中、不明は七五名である。

④ 例えば『大分の歴史』（大分合同新聞社）第八巻一六一頁

⑤ 拙稿「自由民権期の地方自治論」（『大分県地方史』一一〇号）

⑥ 『熊本県の歴史』（山川出版社）二七五頁

⑦ 高木俊輔「立憲帝政党関係覚え書」（『歴史学研究』三四四号）

⑧ 大分県立大分図書館蔵。高木前掲論文所収のものと一致する。ただ、大分図書館蔵のものには、冒頭に「紫溟会々員（大分県）」という

書きこみがされている。

⑨ 高木前掲論文

⑩ 大分県立大分図書館蔵『明倫会一件』綴中「明倫会組織会臨員名簿」

⑪ 同前中「届」。次の「主意書」もこの中にある。

⑫ 同前。但し付綴されている名簿は、用紙によって筆跡が異なり、おそらく正規のものの下書きではないかと思われる。したがって結成届の提出が確実になされたかどうかの判断は、一応保留すべきであろう。

⑬ 大分県立大分図書館蔵

⑭ 大分県立大分図書館蔵『郡制一件』

⑮ 『大分県政党史』二一七頁

⑯ 『明治政史』下巻六四頁

⑰ 井上清『条約改正』（岩波書店）一五一頁

⑱ いま、この実体を明かにし得ない。

⑲ 井上前掲書

（県立碩南高校教諭・[redacted]）

会告

※ 会費のご納入は、次のいずれかでお願い致します。

(1) 郵便振替口座　**下関八―五二九四**　大分県地方史研究会あて

(2) 大分銀行県庁内支店・普通預金口座　**一六四三二一一**　大分県地方史研究会あて